中部のエネルギーを築いた人々

霊峰白山からの流れ 手取川の吉野谷発電所

手取川は霊峰白山に源を発し、手取川ダム・手取湖から中流域の旧鳥越村・吉野谷村・鶴来町を経て加賀平野を潤し日本海に流れる全長72kmの急流１級河川である。

1183（寿永２）年、木曽義仲軍が倶利伽羅峠で平家の平維盛軍に勝利し京都に進軍、増水して濁流を渡る時に多くの兵士が互いに手を取り合って流されないようにして渡ったことから名付けられ、また、手取川は石川の通称で呼ばれたこともあり石川県の由来となったと言われる。

この手取川水系の電源開発は1898（明治31）年に設立された地元の金沢電気瓦斯株式会社が1900（明治33）年、犀川に辰巳発電所建設後、手取川水系に1911（明治44）年から福岡第一、福岡第二、吉野、市原の４発電所を建設した。

その後、白山水力株式会社が吉野谷、鳥越発電所を建設、白山水力と合併した矢作水力株式会社が尾口水力発電所を建設していった。

一方、九頭竜川は福井、岐阜県との県境にある油坂付近に源を発し、九頭竜ダムから大野盆地・勝山盆地を経て福井平野を流れる全長116kmの急峻で崩れ川と呼ばれる１級河川である。

九頭竜川の名の由来は諸説あり、その一つに889（寛平元）年、平泉の白山権現がその尊像を川に浮かばせたところ、一身九頭の竜が現れ、流れに下って黒竜大名神社の対岸につかれた。これ以降、この川を九頭竜川と名付けた。

急流で水量の豊富な九頭竜川は、水力発電の適地として開発が進められ、白山水力が1923（大正12）年から1927（昭和２）年にかけて西勝原第一・第二発電所を建設、大規模電源開発の嚆矢となった。

今月号は、発電所構内に福沢桃介先生寿像と記念碑がある吉野谷発電所を紹介する。

福沢桃介先生寿像
1930（昭和５）年、実業界引退を記念して彫刻家・新田藤太郎によって８体制作され、桃介ゆかりの発電所に設置された

白山水力㈱
手取川・九頭竜川水系の発電所

金沢電気株式会社の設立

北陸地方で初めての電灯は、1893（明治26）年に名古屋電灯が金沢「戎座」に出張点火、「電気灯の大仕掛」として演劇中に点火したのが始まりである。

翌年７月、第５回関西府県連合共進会が開催され、会場の兼六園と尾山神社で5,000燭光のアーク灯２基と小電灯を点灯した。暗黒界を不夜城とした金沢の光景を見るため多くの人が集まった。

その後、電気事業の起業を巡って金沢市や民間事業者などが計画したが資金調達の見込みもないまま経過し、北陸３県では富山、福井に次いで1898（明治31）年に金沢電気㈱が設立された。

最初の発電所は、金沢市街を流れ金沢城に水を引いた犀川に辰巳発電所（出力：240kW）を建設した。開業後より需要増加が続いたため、手取川に水利権を取得し福岡第一、福岡第二、市原、吉野発電所を建設していった。

電気事業が拡大するうちに金沢電気が1908（明治41）年、定款に都市ガス供給事業を追加、ガス事業を開始した。そして社名を金沢電気瓦斯株式会社へと変更した。その後、第１次世界大戦景気期に電力不足になったので吉野発発電所の建設計画を展開した。しかし、大戦後の不況により発電所建設資金の調達が進まず、紆余曲折のうえ、1921（大正10）年、金沢市に事業を譲渡し解散した。

資料１　金沢電気瓦斯㈱発電所一覧

発電所名	辰巳発電所	市原発電所	吉野発電所	福岡第一発電所	福岡第二発電所
河川名	犀川	瀬波川	手取川	手取川	直海谷川
出力（kW）	240－900	709	4,000－4,600	1,600－2,400	1,300
運転開始	明治33年６月	大正９年２月	大正10年２月	明治44年４月	大正７年１月
備考	昭和44年廃止	北陸電力	北陸電力	北陸電力	昭和50年廃止

白山水力株式会社の台頭

白山水力株式会社は白山を水源とし、石川県を流れる手取川水系と福井県を流れる九頭竜川水系の電源開発を行い、地元石川・福井県への電灯・電力供給、大阪方面（京都電灯など）、名古屋方面（東邦電力など）への送電を目的として1919（大正８）年６月に設立された。

資本期は1,000万円、初代社長に伊丹次郎、第２代社長として東園基光子爵（元富山県知事で県営水力電気事業を企業）、相談役に福沢桃介、監査役に平野増吉（庄川問題で活躍した中心人物）が就任した。

設立趣意書には「建設費の低廉なるのみならず日本工業の中心たる大阪まで西勝原より127マイル（＝約203㎞）にして源を日本アルプス山系に発する河川中、送電線路の最も短きものなるを持って吾人は数年前、この電力を大阪に遠送せんとするため計画を立てたるが、爾来福井、石川両県における工業勃興し、電力の需要激増せしをもってこの計画を中

止し、西勝原の15,000kWのうち、その半数7,500kWは福井県における一般電灯電力用として京都電灯株式会社福井支社へ供給する事とし其売買契約すでに成立したれば工事竣工後ただちに相当の配当をなし得べし。残余7,500kWは敦賀における自家工場及び付近の工業用に供給し、手取川水系一部は石川県に供給し、他は九頭竜水系の電力と相俟て適当の計画を立てんとす。」と記載されている。

（1）発電所の建設

1923（大正12）年、九頭竜川水系の西勝原第一発電所（出力：15,000kW）、続いてその放水を利用して発電する西勝原第二発電所（出力：640ｋＷ）を1927（昭和２）年に建設した。

九頭竜川水系の開発を終え、1920（大正９）年に吉野谷ダムの建設工事に着工した。工事は第１次世界大戦後の不況の影響を受け、一時中断したものの1926（大正15）年に完成し、吉野谷発電所が運転を開始した。引続き上流に鳥越発電所を建設した。さらに矢作水力によって尾口発電所を建設していった。

資料２　白山水力㈱発電所一覧

発電所名	西勝原発電所	西勝原第二	吉野谷発電所	鳥越発電所	尾口発電所
水系	九頭竜川	九頭竜川	手取川水系	手取川水系	手取川水系
出力（Kw）	15,000−20,000	640−800	6,250−12,500	13,000	11300−57,600
運転開始	大正12年10月	昭和２年12月	大正15年５月	昭和３年12月	昭和13年12月
備考	北陸電力	西勝原と統合	北陸電力	昭和53年廃止	矢作水力−北陸電力

（2）矢作水力株式会社と合併

1922（大正11）年下期の白山水力㈱報告書には、

「当社発電所発生電力は、当社所属の西勝原吉野谷間送電線路（建設準備中）および西勝原関町間送電線路（既成）により大同電力株式会社の北陸幹線及び南幹線並びに日本電力株式会社幹線を経て名古屋京阪地方に輸送の途を有するのみならず、最近大同に於いては須原塩尻間の送電線路を新設し、発生電力を京浜電力会社送電線路により東京方面に供給するの計画なり、すでに当社発電出力はさらに東都方面の需要に対し新通路終えるに至れり。而して当社は発電力を発生に供給するの計画なり、すでに当社発電出力はさらに東都方面の需要に対し新通路終えるに至れり。嗜好して一面当社は発電力を名古屋市および関西地方を供給区域とする東邦電力株式会社、東京大阪を供給目的地とする大同電力株式会会社の両姉妹会社、並びに日本電力株式社および北陸方面に対し当社の選択に従い販売しうるの有利なる地位にあり。」と記載されている。

このように西勝原（第一）発電所から岐阜県関市まで自社送電線（＝白山水力名古屋線）を建設し大同電力および日本電力との送電線に連携した。また吉野谷発電所から西勝原第一発電所（＝白山水力吉野谷線）までの送電線を建設した。これによって大同電力の送電線と総合融通ができるようになり、当初の設立趣旨とは異なり、白山水力の発電電力の大半が東邦電力に供給することになった。

このように白山水力は1933（昭和８）年に矢作水力と合併した。

吉野谷ダム、吉野谷発電所の建設

吉野谷ダムは石川県白山市、手取川水系尾添川に建設されたダムである。1920（大正９）年に着工、第一次世界大戦後の不況により一時工事の中断があったが1926（大正15）年に完工した。吉野谷ダムの諸元は次の通りである。

① 所在地：石川県白山市荒谷

② ダム形式：重量式コンクリートダム
（堤高：20.45、堤頂長：48ｍ）

吉野ダム全景（吉野谷発電所に送水）

ダムの完工を待って吉野谷発電所が運転を開始した。吉野谷発電所の概要は次の通りである。

① 所在地：石川県石川郡吉野谷村
（現：白山市木滑新）

② 出力：当初6,250kW「1926（大正15）年５月～翌年12,500kWに増強」

③ 有効落差：126ｍ（手取川支流の尾添川・吉野ダムから取水し手取川に放流）

④ 水車・発電機：立軸フランシス水車
（11,500ｋＷ２台）

⑤ 発電機：立軸三相交流発電機（7,500kＶＡ
２台）

この発電所の発生電力の大半が、岐阜県関市までの白山連絡線を経由して東邦電力の羽黒変電所へ送電された。

尾添川上流からみた吉野谷発電所建屋

また、発電所構内入口に福沢桃介先生寿像と昭和５年庚午８月と記載された吉野谷発電所記念碑がある。

吉野谷発電所記念碑と寿像
（1930（昭和５）年に建立）

（寺澤　安正）